



2010年7月14日放送

漢方頻用処方解説 防已黄耆湯①

東海大学 東洋医学講座 張 民浩

防已黄耆湯はボウイ、オウギ、ソウジュツ、ショウキョウ、タイソウ、カンゾウの6つの生薬から構成されている、比較的シンプルな漢方処方です。筋肉に締りがなく、俗にいう水太りで色白、汗をかきやすく、下半身がむくみやすい、さらに疲れやすい虚証タイプの方の体質改善に用いられます。体内の水分代謝を改善することで、浮腫や肥満症に効果を発揮すると共に、最近では変形性膝関節症の痛みや腫れに有効であるとの報告が多く、整形外科領域を中心に、ことのほか注目されている処方でもあります。

この処方の原典は有名な『金匱要略』であり、これには3つの条文が記載されています。そのうちのひとつ、痙湿渴病篇には「風湿、脈浮、身重く、汗出で悪風する者は、防已黄耆湯之を司る」とあります。「風湿に侵され、体が重く、汗が出て寒気がする者に、防已黄耆湯を用いる」という内容です。また、水気病篇にはもう少し詳しい防已黄耆湯についての記載があります。「外台の防已黄耆湯には、風水、脈浮なるは表に在りと為す。その人、或いは頭汗出で、表に他病なし。病の者、ただ下重く、腰より以上和を為し、腰以下当に腫れて陰に及び、以って屈伸し難きを治す」とあります。

これを簡単に説明いたしますと、風水とは風湿と同じ意味で、風は外邪、水は体内の水分の異常偏在、つまり水毒を表します。脈が浮というのは、病気が表在性つまり皮膚とか

筋肉、関節、体の外表面に存在することを示します。そして頭から汗をかいている状態ですが、その他に風邪などの表在性の病気は患っていない。しかし、病人は腰から上は調和がとれて病的な異常はないが、腰から下の下半身が重く、腫れており、その腫れが陰部にも及び、そのために屈伸しづらいほどである、そのようなケースに防已黄耆湯を用いるという内容です。防已黄耆湯を下半身の浮腫、あるいは膝関節の痛みや腫れの治療に用いるという応用は、この条文によるところと思われまます。

また江戸時代の漢方家たちも、次のように解説していますので紹介しましょう。

吉益東洞は『方極』という書物の中で、原典を受け「浮腫で身重く、汗出て悪風し、小便が出にくい者を治す」と述べています。浅井貞庵は『方彙口訣』において、「防已黄耆湯は表の陽気の弱い人が風湿を受け、全身が重い、浮腫、汗が止まらないという類の徴候のあるときによい」と解説しております。

さらに近年の論説では、大塚敬節らが記した『漢方診療医典』において、防已黄耆湯の使用目標について平易に解説がなされており、日常診療に非常に役立つと思われまます。「本方は表が虚して体表に水毒の多い者を治する方剤で、色が白く、肉が柔らかく、俗に水太りと称する体質の人で、疲れやすく、汗の多い傾向の人に用いる。また下肢に浮腫が多く、或いは膝関節が腫痛する者に用いる。有閑夫人で肥えている人にこの証がよく見られる。本方は変形性膝関節症、多汗症、肥満症、下腿潰瘍などに用いられ、また月経不順に用いて、月経を通じることがある」と記載されています。

これらを総合して、防已黄耆湯の方意を一言でいうと、体表の気の巡りを整え、体表の水毒・湿邪を取り除く処方と言えらるでしょう。

ここで水毒について簡単におさらいをしてみましょう。東洋医学では、水は気や血と同じく、体内を滞りなく循環し、生命活動を支えると考えていますが、何らかの原因で水分代謝に異常が生じ、体内に余分な水分が停滞した状態を水毒、或いは痰飲（たんいん）と呼んでいます。ちなみに正常な水分や体液のことを、津液（しんえき）と呼んでいますので、参考にしてください。水毒の原因はさまざまですが、多くは水の代謝に関わる肺・脾・腎の機能失調によるところが多いようです。

水毒は目で見て分かる、つまり有形の水毒と、目で直接確認することのできない、無形の水毒に分けられます。有形の水毒は、風邪を引いた時に出るような痰や、顔や四肢の浮腫、腹水、嘔吐や下痢、関節などの水疱形成や変形・腫脹などが代表的です。次に無形の水毒は、体の重だるさ、四肢のしびれや痛み、頭痛やめまい、動悸や不眠、梅核気と呼ばれる“咽喉や食道部の違和感や閉塞感”などが含まれます。

今ご説明した梅核気は、半夏厚朴湯の使用目標として大変有名ですが、実は半夏厚朴湯は単に気の巡りを整えるだけでなく、構成生薬である半夏・茯苓が中心となって水毒にも対応できるという特長を兼ね備えております。是非参考にされて下さい。

水毒を示唆する他覚所見としては、舌の肥大や歯痕、白く厚い舌の苔、脈では滑脈、腹

診では振水音などが知られています。水毒に対応できる処方としては、本日のテーマでもある防已黄耆湯はもちろん、五苓散や苓桂朮甘湯、猪苓湯、真武湯などが有名でしょう。

水毒についての解説は終了し、それでは次に防已黄耆湯の構成生薬の説明に移りましょう。防已黄耆湯は先に述べたように6つの生薬で構成されていますが、処方名が示す通りボウイとオウギが主薬となっています。防已はツヅラフジ科のオオツヅラフジの茎または根茎で、東洋医学的には去風湿と利尿効果が期待できる生薬です。防已は「腠理（そうり：毛穴）を通じ九竅（きゅうきょう）を利す」と解説されており、この「腠理を通じる」作用によって、体表の気血水の流れを改善することで、停滞した水毒が尿や汗として除去されることが推察されます。同時に通絡止痛効果も期待される生薬です。

現代医学的にも防已の薬理作用は解明されており、主成分はシノメニンという物質で、鎮痛、抗炎症、血圧降下作用があると報告されています。

次に黄耆はマメ科のキバナオウギの根茎で、体表の気を補うと同時に気を巡らせ、外邪の侵入を防ぐ作用が期待される生薬です。また吉益東洞の『薬徴』に「肌表の水を主治する」と記載があるように、防已と同じように体表の水毒を処理する効果も期待されます。

『漢方診療医典』（前出）には「止汗、利尿、強壯剤で、体表の水毒を去る。虚弱者、栄養不良、自汗、盗汗、体腫、小便不利に用いる」と黄耆について解説されています。

残りのソウジュツ、ショウキョウ、タイソウ、カンゾウですが、いずれも健脾作用、つまり胃腸機能を高め、胃腸を丈夫にする働きが期待できる生薬です。先ほどもご説明したように、脾は肺・腎と共に体内の水分代謝に深く関与している臓器でもあります。脾の働きを高めることで、防已と黄耆をバックアップする働きが期待できるわけです。中でもソウジュツは利尿作用が優れており、防已黄耆湯には欠かせない重要な構成生薬であります。キク科のホソバオケラの根茎であるソウジュツは、『神農本草経』に「風寒湿痺による、死肌（しき）、瘰（けい）、胆（たん）を司り、汗を止め、熱を除き、食を消す」と記載があり、関節疼痛や知覚麻痺など湿邪、あるいは水毒によっておこる症状に有効と説明されています。この蒼朮は真武湯、越婢加朮湯など、水毒に対応できる多くの漢方処方に配合されています。